ふるさとの祭りと年中行事 ④

山岳信仰の「三峯講」

＊百年も代参・登拝を続けた屋形の人々＊

みどり輝く初夏、奥秩父の山々はよく晴れていました。5月24日、屋形の「三峯講」では、恒例の三峯登拝を行いました。この講中の代参は、明治18年（一八八五）以来、毎年欠かさずに続けられてきました。

かつての武蔵・甲斐の国境近く、妙法岳から白岩・雲取へと続く三峯山は、奈良時代以降、修験道の聖地として知られ、多くの山伏が峰々を巡りました。とりわけ、北の御岳に鎮座する三峯神社の本社は、イザナギ・イザナミの二神が祀られ、山岳信仰の中心地として栄えてきました。江戸時代には、三峯山は10万石の格式が与えられ、将軍家・大名・旗本など、武家にも崇敬されました。

三峯山の信仰は、信濃・甲斐など山国に始まり、やがて江戸の町々や関東の村々に「講中」が組織されてゆきました。東上総、とりわけ九十九里地方の「三峯講」は、比較的新しいものが多く、現存する講中をみると、ほとんどが明治初期の結成と伝えています。たとえば、旧屋形村（上堺地区）の講中は、明治18年の三峯登山を契機に、村内の有志36軒によって結成され、以来百年間、代参による「本社詣」と正月二十日の「三峯奉射」を毎年欠かさず続けてきました。

この三峯講の奉射は、もともと陰暦の「甘日正月」に行われ、本来は豊作を祈る農耕神事であったものと考えられます。集落単位の鎮守社の奉射とは異なり、36軒（現在は21軒）の構成員は、旧村の全域に及んでいます。神事の内容は、ほとんど一般の奉射と変わりありませんが、来年の当番を決める「座クジ」「代参クジ」に特色があります。まず、一番クジによって5軒の代参人を選び、さらに5軒が二番クジを引いて来年の「座」（当家）を決定します。

初夏、稲の早苗が風にそよぐころ、代参の人たちは「掛銭」を集めて、秩父三峯山への「本社詣」に旅立ちます。この三峯神社への登拝には、「ゴケンゾク」（山犬・狼）を拝借して、その霊験に家庭生活の安全を祈る信仰が含まれています。本社に詣でた代参の人々は、社務所から「火防」「盗賊除」「諸災除」の守護札を受けて帰郷、直ちに講中の家々に配って回ります。お札をいただいた家々では、鄭重に神棚に祀って、家族の健康と一年の家内安全を祈ります。

登拝を終えて山をおりるころ、麓の原生林からは淡い紫雲が湧いて、たおやかに稜線を霞ませていました。祖父から父へ、父から子へと約百年間受け継がれてきた三峯山への信仰。その祈りの背後には厳しい自然に対峙する「農の暮らし」と、家庭和合への素朴な願いがありました。「精進落とし」に泊まった、長瀞の宿で、石畳を駆ける瀬音に眠られず、いつまでも伝統の重みを噛みしめていました。

（文化財審議委員　伊藤一男）

山岳信仰の三峯神社
（埼玉県秩父郡大滝村）